



ジャンボ国際交流部の部員たち。入部の動機はさまざまだが「世界のためになることをしたい」という思いは一つだ

世界とつながる 教室

世界を知って明るい未来をつくる

日本と世界はつながっている。身近なことから世界の問題について考えようと、学校法人八戸聖ウルスラ学院中学・高等学校では、部活動を通じて生徒たちが学びを深めている。



毎年恒例のフィリピンのスタディーツアーで農村部の子どもたちと交流

宮城県国際化協会に行き、震災時の外国人対応の取り組みなどについてインタビュー。自分の足を使って調べることで理解が深まる



視野を広げて ジャンボな人になる

「東日本大震災の時、外国人はどうしていたのかな」
「無事に避難できたのかな」
「避難所で困った人も多かったんじゃない」
「じゃあ、実際に聞きに行ってみよう！」
本州の最北端、青森県南東部の八戸市にある学校法人八戸聖ウルスラ学院中学・高等学校（以下、ウルスラ高校）。放課後の教室で大きな紙を囲み、数人が集

まって話をしている。彼女たちは「ジャンボ国際交流部」の部員。この日のテーマは「在住外国人と震災」。一つのことを議論しても感じ方はさまざま。毎回どんな意見が飛び出すかわからない。

1931年の創立以来、「国際社会に貢献する人材の育成」を方針として掲げるウルスラ高校。世界の人々と助け合い、支え合う心をはぐくんでほしいと、カリキュラムも実にユニーク。特に英語教育が充実しており、異文化理解の授業やアメリカの姉妹校への留学制度もある。そして、もちろん海外といっても欧米だけではない。いわゆる「発展途上国」と呼ばれる国にも目を向けてほしいと、毎年夏には、フィリピンへのスタディーツアーを実施。農村部の子どもたちへの歯みがき指導、現地の同世代の学生たちとの交流などを続けている。

また、「世界」とつながることができると部活動もある。その名も「ジャンボ国際交流部」。現在の部員は20人。毎年4月にテーマを決めて、インターネットや図書館でのリサーチだけでなく、NGOや地域の人にインタビューにも行く。分らないと思ったら直接聞く。それがジャンボ流の学び方だ。

顧問の鳥谷部昌子先生はウルスラ高校の卒業生。彼女自身も高校時代、部活動でボランティアをしていた。「高校生の時にフィリピンの小学校の先生をホームステイで受け入れたことがあったのですが、違う国の人と接すると、こんなにも



文化祭で「在住外国人と震災」について発表。ポスターにも絵やデータを使うなどの工夫が凝らされている

世界が広がるのだと感じました。生徒たちにも人との出会いを通じて、自分はずっとつながり、の中で生きていくことに気がつき、豊かな感性をはぐくんでもらいたい」と話す。日本だけでなく、世界に目を向けて、ジャンボ、な人になってほしい。アジア、さらにはアフリカにも関心を持ってもらいたいという意味を込めて、「ジャンボ（スワヒリ語でこんにちは）国際交流部」なのだ。

身近な問題から 世界とのつながりを感じる

部員がテーマを決める時に大切にしているのは、自分たちが、共感、できるか。「遠いところの国の問題ではなく、それ

が自分の日常生活にどうつながっているのかまで踏み込んでほしい」と鳥谷部先生は期待する。昨年と今年は「在住外国人と震災」がテーマ。東日本大震災は生徒たちにとってもショックが大きかった。日本人でさえ混乱していたのに、日本語が分からない外国人はどうだったのだろうか。それが知りたかったのだ。でも実際に話を聞いてみると、想像と少し違っていた。公益財団法人宮城県国際化協会の職員へのインタビューを通じて、周りの日本人が食べ物や分けてくれたり、多言語での情報提供や相談サービスがあったりと、自分たちの地域の中につながり助けられたという意見を多く聞くことができた。一方で、いろいろと調べていくうちに「炊き出し」など、外国人には説明が難しい災害用語がたくさんあることが分かりました。あらためて日本語で難しいと感じました」と3年生の赤坂光希さん。中学生の時、先輩たちの「水と世界のつながり」の発表に感銘を受けて入部を決めたという彼女は、「外国人とかかわるだけが国際交流だと思ってい

周りの人に、伝える、ことも活動の一つ。部員たちは、オープンキャンパスや文化祭で、手作りのポスターなどを使って発表。それぞれのクラスでも、英語や異文化理解などの授業で発表の場を設けている。また、毎年秋に行われている青森県高校総合文化祭では、国際理解部門で4年連続最優秀賞を獲得。「入部した時はおとなしかった子が、3年生になって堂々と発表している姿を見るのは頼もしい」と鳥谷部先生はうれしそうに語る。「海外に行かなくても国際協力ができる。いろいろな人と会う機会があるこの部活は楽しい。私は人とかかわる仕事に向いているのかも」と3年生の豊川梨樹さん。世界と日本のつながりを知り、自分の将来への道筋を切り開く。日本であれ、途上国であれ、部員たちのグローバルな視野が、世界の明るい未来を照らす光となるに違いない。



8月にJICA地球ひろばで行われた「第49回全国国際教育研究大会」で自分たちの取り組みを発表。外への発信は生徒たちの自信にもつながる